



魔界女子高生編

魔界に捕らえられ、食肉として
貪り食われる美少女達

作者 大黒達也

『魔界女子高生編』

一・作品紹介

女子高の芸能コースに通う生徒達が、部活で合宿に向かった先は、魔界への入り口であった。次々と陵辱され、あげくは食材として調理され食されていく生徒達。

彼女達に救いはあるのだろうか。山奥のペンションで繰り広げられる惨劇。

二・登場人物

桑田くわた 優ゆう

切れ長のくつきりとした二重瞼に鼻筋がとおおり、色白の美人。身長百七十センチ、Bカップでスレンダーな肢体の持ち主。少し茶系が入った髪を肩まで伸ばしている。

香坂こうさか 由梨ゆり

身長百六十センチ。キラキラと輝く円らかな瞳を持ち、可愛い娘系の美人。

工藤くどう 美香みか

女子高の女教師。西洋風のくつきりとした目鼻立ちをした美女。身長百七十センチ、九十×六十×九十センチのグラマラスボディの持ち主。

田所たどころ 瞳ひとみ

身長百七十二センチで瞳は目鼻立ちが整い、銀縁メガネをかけた才女。

小林こばやし 香織かおり

きれいな二重瞼の持ち主、セミロングの黒髪を肩まで伸ばしている。身長百六十五センチ。痩せ型ではあるが、乳房と尻は盛り上が

っている。

佐藤 さとう
香子 かよこ

極上の美尻を持つ、美人。身長百七十八センチ。合気道の達人。

三・目次

- 第一章 ペンション白樺
- 第二章 拉致
- 第三章 女肉料理
- 第四章 極上の獲者達
- 第五章 食人鬼
- 第六章 悪夢

『本編』

第一章 ペンション白樺

二十人乗りの小型サロンバスが、どこまでも続く樹海に造られた道を進んでいた。

車内では、十七、八歳くらいの若い女達が、菓子を食べ、缶ジュースを飲みながら楽しそうに会話をしている。笑い声が絶え間なく聞こえていた。ヘッドホーンのボリュームを最大限に上げ、隣の娘にそれを取り上げられる娘や、無言で窓外を流れる景色に視線を向けている娘の姿も見えた。

最前列の席には、二十代半ばくらいに見えるセクシーでグラマーな美女が座っていた。

「先生？まだ着かなんですか？」

女の後ろの席に座っていた茶髪の娘が、円らな瞳を輝かせながら尋ねてきた。

「そうね。ペンションまで一時間くらいかな」
女は引率の教師なのだろうか。シミ一つ無い腕に嵌められた腕時計を見た。

「うっそ！そんなに」

その娘の隣で、漫画本を読んでいたショー
トカットの娘が、素っ頓狂な声を上げた。

「それくらい我慢できるでしょう」

女が、振向き娘の額を指先で軽く突いた。

その時、稲光がして、数秒後、雷鳴とともに豪雨が、サロンバスの屋根をしたたかに叩いた。少し前まで晴れ渡っていた夏空が、黒雲に覆われていた。

「先生。怖い！」

稲光に怯えた教え子が、シートの中にもたれ越しに、女の背中に抱き付いた時、バスが急停車した。

「どうしたんですか？」

女教師が、黒縁メガネをかけた中年の運転手に尋ねた。

「これ以上は進めないよ」

運転手が指差した先、五十メートルくらい前方に、道路を塞ぐようにして、幹径五十センチほどもある老木が横倒しになっていた。

「迂回路は無いんですか？」

「無いですよ。あそこに行くにはこの道しかないんです。戻るしかありませんよ」

「戻るんですか？ せっかくここまで来たのに」

女教師は、不安な表情を浮かべる生徒達の顔を見渡しながら言った。

「仕方が無いでしょう。この嵐だ。このバスだって危ないですよ」

「この辺りに他の宿は無いんですか？」

女はなおも食い下がった。

「他の宿といたって……。ちよつと待ってくださいよ」

運転手は、ダッシュボードから道路地図を取り出した。広げられた地図に、街は見当たらなかった。

「駄目だ。山ばかりだ」

運転手は独り言のように呟き地図を仕舞い、ギアをバックに入れた。Uターン可能な場所まで後退し、元来た道に戻り始めた。

少し進んだ時、

「ちよつと……。あれを見て！」

女教師の後ろに座っていた茶髪の娘が、叫ぶように言った。道路脇に「ペンション 白樺」という縦看板が立っており、すぐ脇に林

道が繋がっていた。

「運転手さん。あそこを曲がって下さい」

「いいですけど、この辺にペンションなんか、あつたかな」

運転手は首を傾げながら、ハンドルを切り林道にバスを乗り入れた。砂利が敷かれた林道を数キロほど進んだ時、白亜の洋風建築が見えてきた。

周囲を白樺林に囲まれたその建物は、建坪二百坪ほどで、ペンション風の造りとなっていた。

運転手はバスを数百坪はある、ただ広い駐車場に取り入れた。他には若い女の娘に人気がありそうなピンク色のKが1台止まっているだけだ。

いつの間にか嵐は去り、木々の合間から木

漏れ日が漏れていた。

「いい雰囲気じゃない！」

「裏にテニスコートも見えるわ！」

「先生、ここにしようよ！」

女子生徒達が、口々に声を上げた。

「本当。ステキなところね。先生が話をしてくるわね」

女教師がバスを降り、正面玄関に向かった。女教師がドアを開けようとしたとき、ひとりでに開き、中から身長二メートル近い大女が現れた。女は四十代くらいで、肥太った身体を皺だらけの調理服に包んでいた。

「……済みません。今夜泊めていただけないでしょうか？」

「ここはペンションだよ。貴女達は大切なお客様さ」

大女は、腰に両手を当てて満面の笑みを浮かべていた。

「皆、降りてきていいわよ。今夜はここに泊まる事にしたわ」

ペンションには、四人用の個室が十室に、露天風呂がある大浴場が設けられていた。

夕食までには、まだ時間があつたので、引率の教師や生徒達は、大浴場で心行くまで入浴を楽しんだ。

十七歳から十八歳までの柔らかで瑞々しい裸身が、他に宿泊客がいないことをいいことに、湯の中で飛び跳ねていた。

「由梨のエツチ！」

黄色い声が、浴場内に響いた。

「先生。由梨がオツパイ触るんですよ！」
切れ長のくつきりとした二重瞼に鼻筋がと

おり、色白の美しい少女が叫ぶように言った。
身長百七十センチ以上あるだろう。興奮して
いるためか、形の良いCカップぐらいの乳房
と剥き卵のようなすべすべの尻を露にしてい
た。少し茶系が入った髪を肩まで伸ばしてい
る。

「だって、超かわいい胸しているんだもの。
減るもんじゃないのにさ」

身長百六十センチ。キラキラと輝く円らな
瞳を持ち、愛くるしい顔をした少女が可愛い
舌を出した。

二人の女子生徒が、たわわに実った乳房を
惜しげも無く晒しながら、洗い場で髪を洗っ
ていた女教師に近付いた。

「由梨ちゃん。駄目よ。優ちゃん嫌がってい
るじゃない」

女教師が、黒髪についたシャンプーを流しながら、ひとりの生徒を嗜めた。

「わかったよ。その代わり先生のオツパイ触らせて！」

「……」

女子生徒が、教師を羽交い絞めにして、重たげな乳房をもみしだいた。

「止めて！何するの」

「先生のオツパイ大きくて柔らかくて気持ちいい。超最高！」

由梨は頬を赤らめる教師の背中に頬を凭れ、甘えた声で言った。

「仕方が無い娘ね。もう気が済んだでしょう。由梨ちゃんたら本当に甘えん坊なんだから」

女教師の工藤美香は、由梨が幼い頃に母親を交通事故で失っていることを思い出してい

た。

「先生。今夜一緒に寝ていい？」

「いいけど……」

「有難う！行こう。優。露天風呂が気持ちよ
さそうだよ」

入浴後、Tシャツと短パンに着替えた美香
は、ペンションの管理人室を訪ねた。何泊ま
で連泊が可能か確認しようとしていた。

美香はペンションの入り口近くに位置する
管理人室のドアをノックした。返事は返って
来なかった。

「済みません。何方かいませんか？」

ノブを回すと、静かにドアが開いた。鍵は
掛けられてはいなかった。事務机がひとつ置
かれただけの8畳ほどの室内には誰もいなか
った。

美香の視線が、自然と壁に掛けられたスケジュールボードに向けられた。

宿泊客と思われる氏名が、列記されていた。その中に「H学園芸能コースご一行様」という名称も書かれていた。美香が受け持つ教室の名前だ。

不思議なことに、他には女性客の名前しか見当たらなかった。ここは女性専用のペンションなのかと思った。しかし、バスの運転手も泊まっているのだ。

美香は軽く首を振り、ドアを閉めた。ここが女性専用かどうかは大した問題では無かった。

自室に戻ろうとしたとき、胃腸を刺激する匂いを感じた。調理室が近くにあるのだろうかと美香は思いながら、匂いがする方に歩き

出した。そこに管理人がいるかも知れないからだ。調理室のドアは開いていた。

「誰かいませんか？」

美香は声を掛けながら、調理室に入った。

そこにも誰もいなかった。

差し渡し一メートルほどはある巨大な鉄鍋が、火に掛けられていた。匂いはそこから漂い出ていた。上から覗き込むと、ニンジンやタマネギ等の野菜や肉塊が煮込まれていた。今夜はポトフかしらと心の中で呟いた。

部屋の中央に位置する調理台の上には、巨大な俎板が載せられていた。その表面には赤黒いシミがこびり付いていた。俎板の隅には、血痕が付着した刺身包丁や巨大な中華包丁が無造作な感じで置かれていた。近くの床に置いてあったポリバケツには、折れた骨や内臓

と思われる臓器が収められていた。

この部屋で小豚でも捌いたのだろうかと思
うと、美香は少し気分が悪くなった。

調理室を出ようとした時、ドアの近くに置
かれたゴミ箱に女物の下着が入っているのを
見付けた。

よく見るとそれは、若い娘が身につけるよ
うな下着だった。美香は、プロレスラーのよ
うな体格を持つ、管理人の巨体を思い出して
いた。

こんな小さな下着を身に付けられるとは思
えなかった。

「何か用かい？」

突然、背後から肩を掴まれた。

「キヤツ……」

不意に声を掛けられた美香は、驚きあまり

小さな悲鳴を上げた。

「脅かして悪かったね」

管理人の女が、美香を見下ろしていた。

「……いえ、私こそ、黙って部屋に入ってしま……」

「別にいいんだよ。アンタみたいな美味しそうな……いや、別嬪さんならいつでも大歓迎さ」

美香は勝子の視線を、短パンからはみ出した太腿に感じていた。

「あのお、一週間ほど連泊したいのですけど……」

「あんたらなら、いつまでいてくれてもいいよ」

「良かった。それではお願いしますね」

美香は、軽く頭を下げて管理人の女に背を

向けた。

「ゴミ箱に入っていた下着は、宿泊客が部屋に置いていったものなのさ」

管理人の女が声を掛けてきた。

「そうなんですか？」

美香は振向いた。

「何か気にしているみたいだったんでね。そうそう夕飯は六時からだよ。ホッペタが落ちそうになるくらいの料理を用意しておくからね」

管理人の勝子は、去り行く美香の盛り上がった尻や短パンからはみ出た白い太腿を食い入るようにじっと見詰めていた。

「早く食べてみたいね。あの女のケツを……」

勝子は小さな声で呟くように言ってから、口元に浮かんだ涎を手の甲で拭いた。

厨房に入り、ドアに鍵を掛け、奥に向かった。厨房は薄壁で二つに仕切られていた。美香が入らなかつた奥の方のドアを押し開いた。

そこは食材の洗い場となっていた。十畳ほどの室内には、巨大なシンクが置かれ、水道水が注ぎ込まれていた。中には全裸の女が入れられていた。水面から出ていた女の顔は、青白く、視線が宙を漂っていた。まだ、二十歳を過ぎたばかりであろうか、切れ長の二重瞼が美しく、鼻筋も通っていた。口を猿轡で塞がれ、手足も細紐で縛られていた。

勝子は、女に近付き、シンクから軽々と抱き上げて、隣の台に横たえた。スポンジに中性洗剤を沁み込ませ、女の裸身を乱暴な手付きで洗い始めた。

女は手足を洗われているときは、呆然と天

井を見上げているだけであつたが、スポンジを股間にあてられた瞬間、ビクンと白い裸身を震わせた。

勝子の太い親指が女のアヌスに差し込まれていた。女の股間は無毛になっていた。たぶん、剃毛されたのであろう。勝子は女のクリトリスと膣を丹念にスポンジで洗い始めた。敏感な部分をスポンジで刺激される度に女の口から、鋭い喘ぎ声が漏れた。

「いい声で泣くね」

勝子は温水で洗剤を洗い流し、台の引き出しから長さ二十センチ位の張形を取り出して、女の膣に突き込んだ。

女の背筋が大きく仰け反った。勝子は女の太腿を片手で押さえながら、張形を激しい勢いで動かした。女は鋭い喘ぎ声を漏らしなが

ら、目を白黒させていた。

暫く膾を犯した後で、女をうつ伏せに横たえ、膾から抜いた張形をアヌスに根元まで突き込んだ。

女が大きく背筋を反らせ、肩まである黒髪を振り乱した。猿轡を嚙ませられているので、絶叫を上げることができない。

勝子は女の膾に人差し指を根元まで差込んだ状態で、アヌスに入れた張形を激しい勢いでピストンさせた。

アヌスを犯される痛みにも身悶えしていた女の動きが、急に止まった。白目を剥いて失神していた。勝子は女のアヌスから張形を抜き取り、その匂いを嗅いだ。十分に浣腸を施していたので異臭はしなかった。ぐったりとした女を仰向けに横たえ、両腿を持ち上げ、晒

し出された無毛の股間に顔を埋め、激しい勢いで膣やクリトリスを舐り始めた。

暫くすると女は、自然に失神から目覚めた。

初めは、股間に蠢く勝子の頭をぼんやりとした表情で眺めていたが、すぐに歯を食い縛り、低い喘ぎ声を上げ始めた。

勝子の舌技があまりに巧みなために、女はいきそうになっていた。眉間に皺を寄せ、勝子の頭部を太腿で締めつけるようにして果てた。

「いけない。もうこんな時間かい！血抜きをしている時間がないじゃないか！」

勝子が壁掛け時計を見て叫ぶように言った。乱暴な手付きで女を肩の上に抱え上げた。女の盛り上がった白い尻が無残に震え出した。

勝子は、女を担いだまま、隣の部屋に移動

して、女を血痕が付着した俎板の上に横たえた。片手で女の両手を押さえつけ、開いている方の手で女の重たげな乳房や盛り上がった尻の膨らみを揉みしだいた。

「お前、本当に美味しそうな身体をしているね。友達の亜里沙は、ポトフにしてやったけど。お前は刺身とかステーキにしてあげるからね」

近くに置いてあった巨大な中華包丁を頭上に高々と振り上げた。

女の視線が中華包丁に釘付けとなり、手足がわなわなと震え出した。勝子の巨大な手から逃れようと、身悶えしたが、大女の怪力の前では無駄な抵抗に過ぎなかった。

ストーンという音がして、右太腿の付け根に衝撃を感じ、すぐに信じられないほどの激痛

が襲ってきた。また、骨を断つ鈍い音が聞こえて来た。今度は左足であった。女はあまりの激痛に意識を失っていた。

俎板の上には、切断された両足と胴体が無造作な感じで並べられていた。胴体の切断面からは、真っ赤な鮮血がドクドクと流れ出していた。

勝子は切断した右足の付け根部分を両手で俎板に押し付け、血抜きを行った。左足にも同様の処置を行った。

まだ、息のある女の腹部を刺身包丁で縦に切り開き、色とりどりの内臓を露出させた。血塗れの肝臓を切り取り、俎板の上に置き、細かくスライスし始めた。

ひとつの切れ端を口に放り込んだ。目を閉

じて溜息を漏らした。

「お前のレバーは、舌の上で蕩けるようだよ。山ワサビ醤油で食べたなら、最高だろうね」

大量出血のために、息絶え絶えの女に語りかけた。勝子はレバ刺しの次に、女の股間に刺身ナイフを入れ、膣周辺部分を子宮ごと切取った。

「ここは、アタイ専用さ。こんなに美味しい物、客なんかには食わせないよ」

女は既に息を引き取っていた。勝子は女を裏返しにして、盛り上がった白い尻を刺身包丁で切り分けた。黄色い脂肪層を削り取り、現れた赤身の肉をブロック大に切取った。それをステーキ大の大きさに切り分けていった。

血抜きをした太腿も皮を剥ぎ、巨大な中華包丁で輪切りにしていった。大腿骨を断つ音

が厨房に響き渡っていた。

午後六時三十分、ペンション一階にある食堂に女子生徒8名と引率の女教師が集まっていた。

十人掛けの長テーブルには、前菜のサラダやオードブルが所狭と並べられていた。

「さあ。今夜のメインディッシュだよ」

管理人の勝子が、ステーキ皿を並べた大型のキャスターテーブルを押ししてきた。皿の上には、肉汁が滴る熱々のステーキが載せられていた。

「美味しい！オバサン、これ何の肉なの？」

優が目を丸くしながら、勝子に尋ねた。

「豚肉だよ」

勝子が他の女子生徒に皿を手渡しながら答

えた。

「豚肉なの！こんな豚肉食べたこと無いよ」

側で会話を聞いていた由梨が、ステーキを頬張りながら会話に入ってきた。

「飼育方法を工夫しているからね。そんじよそこらの豚とは違うよ」

勝子が得意満面といった笑みを浮かべた。

「オバサン。御代わりは無いの？」

近くにいた女子生徒の瞳は、空の皿に付着していた肉汁をジャガイモの切り身にナイフで塗り込んでいた。

「まだ、いっぱいあるからね。たんとお食べ」

勝子は、美しい顔立ちをして、銀縁メガネをかけた才女風に見える瞳の皿に、ステーキ肉を一枚載せた。

「本当、美味しいわ。いくらでも食べれそう

ね」

教師の美香も赤ワインをグラスで飲みながら、肉汁が滴るステーキ肉に舌鼓を打っていた。

「この肉はね。若い雌豚の腿肉なんだよ。癖が無いだろう。口の中で蕩けるんだよ」

管理人の勝子は、何時の間にか、優の前の席に座り、両肘をテーブルの上に付いて、優の顔を食い入るように見詰めていた。

「なんでそんなに見ているの？」

優は自分をじっと見詰める勝子に、不気味なものを感じていた。

「お嬢ちゃんがあんまり可愛らしいからだよ。あんた背も高くスタイルいいね。そうそう珍味があるけど食べるかい？」

「珍味？」

優が可愛らしく小首を傾げた。

「雄豚のあそこを煮込んだものさ」

「あそこって？…まあ…」

優が頬を真っ赤に染めて、俯いた。

「優、何照れてるんだよ。オバサン、豚のチンポって美味しいの？」

由梨が横から会話に入ってきた。

「そりゃあ最高に美味しいよ。食べるかい？」

「食べてみたいな」

「待っておいで」

勝子が巨体を揺すらせながら、厨房の奥へと消え、厚手の鍋を持ってきた。ゼリー状の煮こごりが付いた肉片を由梨の皿に載せた。

「コリコリとした感じだよ。あっ……！いけるよ。超！美味しい！」

由梨は満面の笑みを浮かべ、口を動かした。

「これは何？」

近くで様子を見ていた香子が身を乗り出すようにして言った。

「タマタマさ。食べるかい？」

「……」

無言でじっと魅入っていた香子の皿に、肉片を載せた。

「食べても大丈夫なの？」

そう言いながらも料理から目を離すことができなかった。

「当たり前だよ。物凄く生がくんだ。騙されたと思って食べてみな」

「……」

香子が白魚のような手に持ったフォークで、肉片を突き刺し、恐る恐る口に運んだ。

「……ほ……本当ね！美味しいわよ。優も食べ

てごらんよ」

「私はいいよ。遠慮しておく」

「まったく。優ったら。可愛娘ぶっちゃって」

由梨が二人の間に後ろから身を乗り出してきて、肉片を指先で摘み上げ口に放り込んだ。

「美味しい。病み付きになりそうだよ。食わず嫌いは損だよ」

「そうかい。そんなに気に入ってくれたかい」
勝子は皆の様子を眺めながら、満足げな笑みを浮かべていた。

深夜零時過ぎ、生徒達は疲れたのか、全員がベッドで可愛い寝息を立てていた。

静寂の中、突然、獣の咆哮が湧き上がった。

「な……何？」

優がベッドから跳ね起き、隣のベッドで寝ていた由梨に抱き付いた。

「どうしたんだよ？まだ、真夜中じゃないか」
由梨が臉を手の甲で擦りながら、優に聞いた。

「あの唸り声が聞こえないの？」

「唸り声？」

由梨は聞き耳を立てた。

「何も聞こえないよ」

由梨が言うとおり、辺りはひっそりと静まり返っていた。

「さつきは聞こえたのよ。本当よ」

優はなおも食い下がった。

その時、再び、獣の咆哮が闇を引き裂いた。

「静かにおし！こいつで我慢しな！」

どこからか、管理人の勝子の怒声が聞こえて来た。

「行ってみよう」

由梨と優は手に手を取り合い、一階の玄関ホールに向かった。そこには、既に生徒達にやる人たかりが、できていた。

「済まないね。起こしちまって……」

勝子が頭を掻きながら、集まってきた生徒達に話し掛けた。

「今のは、何だったんですか？」

パジャマ姿の美香が、勝子に尋ねた。

「ああ……。あれかい。野良犬だよ。すぐ近くまでキヤガッテさ」

「外じゃなくて、家の中から聞こえていたよ」

瞳が階段下の地下室へと通じる木製のドアをじっと見詰めながら言った。

「そんな訳ないじゃないか。さあ、もう遅い時間だ。皆、寝た方がいいよ」

勝子は生徒達をその場に残し、大欠伸をし

ながら管理人室へと消えた。

第二章 拉致

翌朝、早く真由美と彩の二人は連れ立って、ペンション裏手にある森にハイキングに出かけた。森へと続く林道の両側は、樹齢を重ねた広葉樹と針葉樹が繁茂し、高い木立から柔らかな木漏れ日がさしていた。

二人はミニスカートに、ジャンパーという服装だった。ミニスカートから食み出した白くピチピチとした太腿が瑞々しかった。

二人は時折、立ち止まった。まるで恋人同士のように手を繋ぎ、周囲から聞こえてくる、野鳥達の声に聞き耳を立てていた。森は二人の想像以上に奥深く、藪がガサガサと物音を立てる度に抱き合い、黄色い叫び声を上げて

いた。

林道は何処までも続いていた。一時間以上も歩いた時、森は途切れ、目の前に湿原地帯が現れた。何時の間にか日差しは無くなり、周囲には深い霧が立ちこめていた。

「彩。そろそろ帰らない」

長身の真由美が心細そうに、彩の手を握り締めた。

「まだ、早いじゃん。もう少し行ってみようよ」

彩が腕時計に目を落とした。

「何か気味悪くない？」

真由美が端正な顔立ちで周囲を窺った。

「真由美。怖いんだ？」

「……。ちよつぴりね」

「真由美だったら。超可愛い！」

彩が自分より二十センチ近く背が高い真由美の腰を両手で抱いた。

「彩は怖くないの？」

「当たり前前ジャン！真由のこと守ってあげるね」

彩は真由美の腰をぎゅっと抱き締めた。そのまま少しの間、二人はじっとしていた。

「もう少し奥に行ってみようよ」

彩が湿原に通された林道の先を指先で指し示した。

「うん」

彩が真由美の手を引いて先に歩き出した。十分くらい進んだころ、深い霧は嘘のように消えていた。前方に白い物が見えた。

「何、あれ？」

彩が指差す方向に、中型バスの天井が見え

ていた。二人で近くに寄ってみた。

「あっ……」

「私たちが乗ってきたバスじゃない！」

湿原の沼に半分まで、車体を沈められたサ
ロンバスが横たわっていた。

「何なのよ。これは……」

サロンバスの近くに、昨日ペンションの駐
車場に止まっていたKの車体半分が水面から
突き出していた。その向こう側には何台もの
車両が沼にはまっている様子が見えた。

「帰ろう」

先ほどまで元気が良かった彩が、真由美の
手を強く握り締めた。

「うん。先生に報告しなくちゃ」

二人は手を取り合って、元来た道を足早に
戻り始めた。

二十分ほどで湿原地帯を抜け、深い森の中を抜ける林道の入り口に辿り着いた。

「もうだめ。限界よ」

長身の真由美が立ち止まり、肩を落とし、両手で膝を抑え苦しそうに息を切らしていた。

「そうね。少し休もうか」

彩が周囲を見渡し、休憩ができそうな場所を探した。一時間ほど前に通ったときは霧が深く気が付かなかったが、林道には脇道があり、三十メートルほど先に山荘風の建物が見えた。

「あそこで少し休んでいこう」

彩は、真由美の手を引いて脇道を歩き出した。

二人は、鬱蒼とした森の中に佇む山荘風の建物の前に暫し佇んでいた。築30年以上の

木造平屋建ての古びた建物であった。

「どうする？」

「どうしよっか？」

二人は、何故かドアをノックすることを躊躇っていた。

「大丈夫だよ。きっと」

彩が躊躇いがちにドアのノブを回した。鍵は掛けられてはいなかった。

「こんにちは。誰かいませんか？」

彩のいつに無く、か細い声が暗い廊下に響いていた。

「誰もいないようね」

彩の影に隠れるようにしていた真由美が蚊の泣くような声で言った。

「そうだね。ラッキーじゃん。少し休ませて貰おうよ」

外は、夏とは言え、高所のためか風が冷たく冷え冷えとしていた。

二人は暗い廊下を歩き、居間と思われる部屋に向かった。二人の立てる足音がギシギシと響いていた。

居間には、古ぼけたソファ―セットが置かれていただけで、伽藍とした感じだ。

彩が、長椅子に真由美を腰掛けさせ、隣に座った。

「少し前まで誰かいたみたいだね」

彩は、古めかしい暖炉の中に残る木々の燃えかすが、白い煙を上げているのを認めていた。

「この家。お化け屋敷みたいで、なんだか気味が悪い感じね」

真由美のか細い肩が微かに震えていた。

「幽霊ならまだマシだよ。人間の方がずっと怖いわ」

彩が囁くように答えながら、リュックから水筒を取り出して、湯気が上がる番茶をカップに注ぎ、真由美に手渡した。

「有難う。少し落ち着いたみたい」

真由美は一口飲んで、彩に返した。彩はゆっくりと残りを飲み干した。

「ねえ。この家、探検してみない。平屋だけど、奥にまだ部屋があるようだよ」

彩が言いながら、立ち上がった。

「そうね。台所もあるようだし」

真由美が彩を見上げながら言った。

「食べ物ギッチャおうか」

「彩ったら。悪い娘なんだから」

真由美の顔に少し笑顔が戻ってきた。二人

は手に手を取り合って居間を後にした。

「何か。変な匂いしない？」

彩が台所に繋がると思われるドアのノブを回しながら、囁くように言った。

「何の匂いかしら」

真由美が可愛い首を傾げた。その時、彩がゆっくりとドアを押し開けた。窓にはカーテンが掛けられ、室内は薄暗かった。二人でゆっくりと奥へと進んで行った。

厨房の中央に大きな調理台が鎮座していた。臭いはどうやらそこから漂ってきているらしかった。その上には何か大きな物が載せられ、青色のビニールシートが掛けられていた。

「何かな？」

彩がシートの端を掴んだ。

「ねえ。彩。止めようよ。何か気味が悪いよ」

「大丈夫だって。でもさ。死体だったらどうする？」

「馬鹿言わないでよ。彩の意地悪」

「よいしょっと……」

「嫌！……何なの！」

「うっ……し……死体……ギャー……！」
シートの下から現れたのは、人間の全裸死体であった。

二人は抱き合うようにして、その場に座り込んでしまった。立ち上がろうにも腰に力が入らない。暫しの間、厨房内に女達の泣き声が響いていた。

「彩……。ここ……から……出ようよ」

真由美がやっどのおもいで、声に出した。

「こんなとこやだよ」

気丈な筈の彩であったが、声が空ろになっ

ていた。二人は手に手を取り合い立ち上がった。

「この人、運転手じゃない！」

真由美が叫ぶように言った。

「そうだね……。誰が殺したんだろう。チンポが切取られているよ」

彩が剥き出しにされた血塗れの下半身を見詰めていた。彩が言うとおりに、股間は切り裂かれ、大量に出血していた。

「あたいが殺つたのさ」

ふたりは、ゆっくりと声がした方に振り向いた。

「あんたは……」

「そうだよ。ペンション管理人の勝子オバ様さ。アタイはね。男の固い肉が苦手だね。お前達の夕食にと思って、チンポを料理してや

「ったんだよ」

「チンポ……料理。何のことよ……。あつ
……」

真由美は、その場に腰を落とし、前のめりになり、胃の内容物を吐き出した。

「もしかして……」

彩は口を押さえて必死に、耐えていた。二人は、昨夜、夕食に出された豚のペニス料理を思い出していた。

「吐いたって無駄だよ。とつくにウンチにな
っているさ」

勝子は二人の若い娘をねっとりとした視線で舐め上げるように見詰めた。

「本当に若い娘はいいね。肌なんかピチピチ
で、生で食いつきたいね」

勝子は言いながら、二人のミニスカートか

ら食み出した白い太腿を食い入るように見詰めた。

「真由美。逃げるよ！」

彩が、真由美の手を引いて、出口へと走った。ドアのノブにしがみつく様にして、回そうとしたが、鍵を掛けられているのか、開けることはできなかつた。

「無駄なことはお止めよ。美味しく料理して食べてあげるからね」

背後から勝子が、両手を広げてにじり寄つて来た。

「来ないで！」

真由美が大粒の涙を浮かべながら絶叫した。

「この変態ババア！真由美に手を出したら殺すよ」

彩が、身長差が四十センチくらいもある勝

子に、素手で臨みかかっていた。勝子の右腕が一閃し、彩の頬を力任せに殴りつけた。彩はもんどりうって、床を転がり、失神して動かなくなった。

「あたいはね。お前みたいにスタイルが良くて、色白の娘が大好物なのさ」

勝子が、戸口に呆然と佇み、嗚咽を漏らす真由美に近付いた。真由美に抱き付き、衣服の上から、乳房を驚掴みにして、口に喰い付いた。すぐに真由美の舌を舐る淫靡な音が聞こえて来た。

「若い娘の唾は美味しいよ」

勝子は満面に笑みを浮かべながら、真由美が着ていたTシャツを片手で紙のように引き裂いく。ブラジャーを筆り取り、剥き卵のようになくすべすべの乳房を剥き出しにさせた。

「うーむ。最高の食材だよ。シミひとつ無いじゃないか。オツパイなんか、白くて何て柔らかいんだろう。まるでマシユマロだね」

勝子は、溜息を漏らしながら、真由美の豊かな乳房をゆつくりと揉みしだいた。真由美は目を閉じて、嗚咽を漏らしながら、為すがままだ。二メートル近く上背がある勝子に対し、為すすべが無かった。

勝子のごつい右手が、真由美の下半身に伸びていく。ミニスカートを引き裂かれ、パンティも紙のように千切り取られた。

勝子は、全裸に剥かれ震え慄く真由美の両脇を両手で抱え上げ、自分の両肩に真由美の両足を載せ、真由美の剥き出しにされた股間を覗き込んだ。

「いい眺めだよ。まったく。オマ＊コ、あん

まり使い込んではいないようだね。オバサン
がいかせてあげるよ。うひっひっひっひっひっひっ……。
どれどれ、味はどうかね。むぐ……」

真由美の膣に喰らいつき音を立てて舐った。
真由美の豊かな白い尻が無残に震えていた。

「女子高生のオマ＊コは最高だね」
今度は真由美を後ろ向きにさせ、逆さ吊り
にして、尻の割れ目に顔を押し込み、アヌス
を舐り始めた。

「美味しいよ。お前のケツは……」
勝子は狂ったように真由美のアヌスを舐め
回した。真由美は髪を振り乱し泣きじゃくっ
ていた。真由美のアヌスを十分に堪能した後
で、ズボンを脱いだ。股間には禍々しい感じ
のペニスバンドが嵌められていた。

真由美を床に腹這いにさせ、盛り上がった

白い尻を押さえつけ、臆に巨大な張形を突き込んだ。

「厭！」

真由美の背筋が一瞬大きく反り返った。勝子が狂ったように腰を前後させた。真由美の白い裸身が、木の葉のように揺れ動いていた。暫くして、勝子は真由美の臆から、血塗れの張形を引き抜いた。

「お前、処女だったのか？それじゃあ、こっちも初めてだよね」

勝子は、激しく動いたためか、額に汗をかいていた。血塗れの張形の根元を掴み、ゆっくりと真由美のアヌスにのめり込ませていく。

「ギャー！死んじやう！」

真由美が絶叫を上げ、手足をばたつかせた。

勝子がかまわず、根元まで突ききれ、再び腰

を激しく前後させた。

真由美は白目を剥いて、全身を震わせ意識を失った。勝子は人形のように動かない真由美のアヌスを犯し続けた。

暫く真由美のアヌスを味わった後で、調理台に横たわっていた運転手の遺体を片手で、床に押し落とした。その上に意識を戻さない真由美をうつ伏せに横たえてから、床に転がり意識を失っていた彩を抱き上げた。

「この娘もいい身体をしているよ。涎が垂れそうだよ。まったく」

真由美の横に、彩を横たえ、衣服を脱がせ始めた。すぐに若く瑞々しい裸体が露にされた。

勝子は、彩の両腿を押し開き、露になった膣に顔をつけ、激しい勢いで舐り始めた。

「うっ……。なんだよ。変態野郎！何やって
いるんだ」

彩が意識を戻した。手足をばたつかさせ、
勝子の舌から逃れようともがいた。

その時、勝子の拳が彩の鳩尾を叩いた。

「うっ……」

彩は低い呻き声をあげて動かなくなった。
意識が朦朧としているようだ。

「まったく、お前は聞き分けが悪い娘だよ。

お仕置きものだね」

勝子は調理台の開き戸を開け、中から長さ
三十センチ、幅四センチほどの播り粉木を取
り出し、彩の膺に宛がった。

「お前。まだ処女だろう。お前のようなハネ
ツカエリにはこいつで十分さ」

勝子が播り粉木を持つ手に力を込めた。も

う一方の手で彩の乳房を握り締めながら、押し込んでいく。

「ギャー！」

彩が髪を振り乱し、全身を震わせた。勝子はお構いなしに挿り粉木を突きこんだ。彩の裸身が大きく仰け反った。すぐに白目を剥いて失神した。

「こんなんでは済まされないよ」

意識を失った彩を、裏返しにして今度は、アヌスに挿り粉木を突き込んだ。

「うっ…。ギャー！」

あまりの激痛によるものか、彩は息を吹き返し、絶叫を上げた。勝子は目を爛々と輝かせ、挿り粉木で彩のアヌスを犯し続けた。

再び失神した彩を、うつ伏せに横たえ、調理台の下に巻かれていたホースを掴み、その

先端の金属でできたノズル部分を血塗れのア
ヌスに差込み、ホースに付いていたスイッチ
を押した。すぐにゴボゴボという音が聞こえ
て来た。

「お前は、すぐに調理してやるよ。その前に
お腹の中をきれいにしなくちゃね」

勝子は吸引機で、彩の腸内の便を吸い出し
た後で、巨大なシンクに彩を横たえ、全身を
水洗いした。水洗いの途中で彩は意識を取り
戻した。巨体の勝子には歯が立たないことを
悟ったのか、彩は絶望に打ちひしがれ、呆然
とした表情をしていた。

それを終えた後で、彩を肩に担ぎ、部屋の
隅に置かれていた金属製の箱に近付いた。箱
の上部の蓋を開け、中に爪先から彩を押し込
んだ。

「これから、昼食の支度をしなきゃいけないのさ。お前の仲間達のためにだよ」

勝子が、金属箱の中に立ち呆然と立ち尽くす、彩にねっとりとした口調で語りかけた。

「ちよつと痛いけど我慢するんだよ。お前の挽肉でミートスパゲッティを作るのさ」

それを聞いた彩の全身がわなわなと震え出した。

「お……お願い。そんなことしないで。殺さないで……」

気丈な彩が、空ろな視線で嗚咽を漏らしていた。

「駄目だね。お前達は最高の食材なんだよ」

勝子は、彩の黒髪を右手で掴みながら、金属箱の電源スイッチを押した。

キューーンという金属音とともに、彩が白

目を剥いて、口をパクパクさせた。ブツブツと何か磨り潰されていく音が聞こえていた。激しく上体を震わせていた彩の裸身が、一瞬仰け反り、ガクリという感じで肩を落とし、た。金属音はやがて止まり、静寂が訪れた。

勝子が、彩の黒髪を引っ張ると、彩の頭部が引き出された。勝子は鼻歌を歌いながら、彩の生首を調理台の上に横たえられていた真由美のすぐ近くに置いた。

勝子は先ほどの金属箱のところに戻り、腰を屈め箱の下にある扉を開いた。中には彩のものと思われる細かく磨り潰された挽肉が、トレイの中に収められていた。

勝子はその中に指を入れ、肉汁の付いた指先を舐め回した。

「最高の味だよ。ハンバーグにしてもいける

ね」

勝子は、大鉦を右手に持ち、真由美がうつ伏せに横たわる調理台の前に立った。

「お前はいい娘だったから、楽に死なせてあげるよ。そうだね。お前を今晚のメインディッシュにしてあげるね」

不気味な笑いを浮かべながら、真由美の黒髪を掴み、大鉦を大きく振り上げ、勢いよく振り下ろした。

ストーンという音がして、真由美の首と胴体は切り分けられた。勝子は、顔に返り血を浴びたのも、気にせず真由美の解体にとりかかった。手足を切断してから、アヌスにホースの先端を差込、便を吸い出した。

その後で、腹部を刺身包丁で切り裂き、色とりどりの内臓を掴み出した。肺や胃腸や膀

膀胱はポリバケツに捨て、肝臓と心臓それに子宮を白いトレイに入れ、ラップで封入し、大型冷蔵庫に収めた。

空になった胴体に野菜や米を詰めて、さらに全体を卵の黄身をつなぎとした岩塩で包み込み巨大なオーブンに入れ、スイッチを押した。

「ああ、もう十一時になるんだ。そろそろ昼食の支度をしなくちゃね」

勝子は独り言を呟き、彩の肉体で作った挽肉をタッパーに詰めて山荘を後にした。

「さあ。皆、お腹好いただろう？お昼はミートスパゲッティだよ。たくさん作ったから、いっぱいお食べ」

食堂には、女教師の美香と生徒達五人が食卓テーブルの席に付いていた。

「もうお腹ペコペコよ」

優が勝子に向かって話し掛けた。

「そうかい。お嬢ちゃん達のために腕によりをかけて作ったから、ホッペタが落ちるくらい美味しいよ」

勝子が優の皿にスパゲッティを盛りつけながら、笑いかけた。

「オバサン、いっぱいよそってね」

食べ盛りの由梨が、円らな瞳を輝かせながら催促した。

「はいはい。いくらでもあるからね」

「……何？この味は？」

優が宙を見て絶句した。

「口に合わないかい？」

「これまで食べたスパゲッティで一番美味しいわ。特にお肉の味が……。何ていうか最高

に美味しいの」

「そうかい。そんなに気に入ってくれたかい。
嬉しいよ」

「本当。私もこの味が気に入ったわ」

女教師の美香が、溜息を漏らした。生徒達は皆、御代わりをして、勝子を喜ばせた。

昼食後、生徒達は快晴の下、裏庭で夕方になるまでテニスを楽しんでいた。

燦燦と降注ぐ高原の日差しの中で、女子高生達の弾ける様な肢体がコートの中を動き回っていた。少し離れた白樺の木陰では、管理人の勝子が佇んでいた。勝子の暗い視線が生徒達に注がれている。由梨や優が上げる黄色い声が聞こえて来た。

「本当に美味しそうだね。若い娘のお肉は、きつとホツペタが落ちるくらい美味しいよ」

勝子は独り言を囁いてから、手の甲で滴り落ちる唾液を拭いた。

第三章 女肉料理

「先生。真由美達が戻らないんだけど……」

日も暮れる頃、香子が美香の部屋を訪れた。

香子は生徒達の中で、最も長伸の娘だった。

百七十八センチはあるだろうか。均整のとれたスーパーモデルのように美しい体型をしていた。

いた。茶系の髪を肩まで自然な感じで垂らし、

目は美しい切れ長の二重瞼であった。黒系の

洋服が似合うクールな雰囲気を持ち主でもある。

「先生も心配していたの。もう帰ってもいい時間よ。この辺じゃあ、携帯も通じないし……」

教師の美香は、香子を窓際のソファに座らせ、ティーカップで熱い紅茶を勧めた。

「何か、このペンション気味が悪いんですけど」

香子が豊かな胸に片手をあて、肩をすくめるようにして言った。

「お風呂は広くてステキじゃない。管理人も気さくなひとよ」

美香は窓外に広がる原生林に視線を向けながら言った。

「そうですか。お風呂は中々いい感じだけど。管理人は……」

「そうね。ちよつと変わっているかな。でも、先生は平気よ」

美香が香子のきれいな手を優しく撫でながら、言った。

「暗くなってきましたね」

香子が窓外に目を向けた。

「ちよつと捜してくるから、貴女達はお風呂にでも入って休んでいて」

美香が立ち上がり、ジャンパーを着はじめた。美香は管理人の勝子に、ハイキングに出かけた女子生徒が戻らないので捜しに行くことを伝え、ペンションを後にした。今朝、生徒達が行くと言っていたペンション裏手に広がる原生林の森に向かった。陽は西に傾き、辺りは黄昏に包まれようとしていた。暫く進んだ頃、背後から足音が聞こえて来た。

「真由美ちゃん。貴女達なの？」

振向いた美香が目にしたのは、管理人の勝子であった。右手には大振りの鉈を持っていた。

「夜はね、女ひとりじゃ、とても危険なんだよ」

勝子が手にした鉈を凝視している美香に声をかけてきた。

「……」

「こいつかい？熊避けのためさ」

「一緒に捜していただけののですか？」

美香は、身長二メートル近くはある勝子を見上げた。

「もちろんだよ。あんたみたいな美人のためだったら何でもさせてもらうよ」

「ご迷惑をおかけします」

美香が軽く頭を下げたとき、後頭部に凄まじい衝撃を受けた。一瞬で意識を失い地面に倒れた。勝子の左拳が美香の後頭部を叩いたのであった。

「まったく。女なんてチヨロイものさ」

勝子は独り言を言いながら、意識を失い地面に横たわる美香のスカートを引き下ろし、パンティを筆り取った。周囲が薄暗い中、陶器のように白くすべすべの美尻が剥き出しにされた。

「思ったとおり、最上級のお肉だよ」

尻の割れ目に顔を押し付け、アヌスを舐めた。温泉に入った後なのか、石鹸のいい香りが鼻腔をくすぐった。

「うーむ。堪らないね」

一言言うと、下半身を裸に剥かれた美香を肩に担ぎ、林道を奥へと進み始めた。

香子は教師の美香を玄関まで送り届けた後、一時間ほど仮眠を取ってから、ひとりで風呂に向かった。同室の瞳は優達と部屋でビデオ

鑑賞をしていたので、誘わなかった。広大な浴室は、香子以外誰もおらず、ひっそりと静まり返っていた。

湯気を上げる大きな浴槽に、高校生とは思えないほどのグラマーな裸身を沈めた。最高の湯加減だ。少しの間、目を瞑り、疲れを癒していた。

「背中流そうか？」

「えっ……」

一人だと思っていたが、他に先客がいたようだ。振向くと、浴槽の側に醜く肥太った勝子が、前も隠さず立っていた。

「いや、結構です」

香子は、胸と腰をタオルで覆い隠しながら、立ち上がった。

「あんた。高校生だろう？いい身体している

ね。女のタイから見ても惚れ惚れするよ」

「……」

香子はそれには答えず、無言のまま立ち去ろうとした。

「待ちな」

勝子がこれまでとは違うキツイ口調で言ってきた。香子は立ち止まり、鋭い視線で二メートル近く背丈がある勝子を見上げた。

「何ですか？」

挑むように勝子の目を見詰めた。

「アタイはね。こう見えてもバイでね。わかるだろうバイセクシャルさ。あんたのようにいかした娘を見ると欲情しちゃうんだよ」

肥太った巨体を揺らしながら近付いてきた。

「何を言っているんですか？」

香子は後去った。

「だから。お前を抱きたいといっているんだよ」

巨体の勝子が、目を爛々と輝かせ両手を広げて、香子に覆い被さってきた。とっさに香子は勝子の右腕を取った。勝子の巨体が1回転して背中からタイル張りの床に叩き付けられた。香子は合気道の女子高生チャンピオンであった。

勝子は「うっ……」という呻き声を上げ、動かなくなった。

「大丈夫ですか？」

香子は、勝子が怪我をしたのかと心配になった。とっさのこととは言え、有段者の香子が、武器も持たない素人に怪我をさせた場合、罪に問われる可能性がある。

勝子の大きな顔を見下ろしたとき、勝子の

両目がかつと見開かれた。

勝子の万力のような両腕が、腰に絡みついてきた。一瞬で抱き寄せられ、異臭のする口で、唇に吸い付かれ舌を吸われた。全力で抗おうにもまったく歯が立たなかった。舌の次は形がよく豊満な乳房を存分に舐られた。

なおも抗おうとしたとき、勝子の拳が鳩尾にのめり込んだ。苦しきのあまり息もできなくなり、全身に力が入らなかった。

勝子の頭が徐々に降りていき、今は股間に張り付いていた。ざらついた舌先でガツガツといった感じで膣を舐られた。

裏返しに横たえられ、今度は盛り上がった白い尻を舐め回された。アヌスの奥まで舌は侵入してきた。

香子は同性に犯される屈辱で身を焦がして

いた。自然に嗚咽が漏れた。

徐々に力が戻ってきていた。勝子を跳ね除け、起き上がろうとしたとき、背後から両腕を掴まれ激しい勢いで動かされた。両肩の関節が外れる鈍い音が聞こえ、すぐに激痛が襲ってきた。うつ伏せのまま、膣とアヌスに太い指先を差し込まれた。指先は香子の中で狂ったように動いている。Gスポットを刺激され、思わず喘いでしまった。

「お願い。許して下さい」

香子は涙ながらに懇願した。

「ふざけんじやないよ。お前は、アタイの物になったんだ。これから存分に犯り抜いてから、料理して食ってやるんだ。どうだい。この脂の載った美味そうな肉は……」

勝子のごつい右手で、盛り上がった白い尻

を撫で回された。

「涎が出てきたよ。どうやって調理された
い？焼肉かい？それともお友達のようにミン
チにされたいかい？」

「お……お友達？」

「そうさ。二人ズレでハイキングに行っただ
ろう？帰って来る訳無いさね。お前やアタイ
の腹の中だものね。今頃、ウンチになってい
るさ」

勝子は指を激しく動かしながら、楽しそう
に笑った。

「ああ……。うっ……」

最後の言葉は耳に残らなかった。同性によ
る巧みな愛撫のために、関節を外された苦痛
も和らぎ、香子の裸身は反応し始めていた。

「逝っていいんだよ。お前には最後のSEX

なんだから。たんとお逝き」

勝子は、目の前のすべすべの尻を食い入るように見詰めながら、香子のアヌスと膣を指先で犯していた。香子は今、ただ、髪を振り乱し、鋭い喘ぎ声をあげ続けるだけであった。

そのうち、香子の背筋が一瞬仰け反り、ガクンという感じで突っ伏し動かなくなった。

勝子は意識が朦朧とする香子を肩の上に担ぎ上げ、浴室の出口に向けて歩き出した。調理場に香子を担ぎ込んだ勝子は、調理台の上に向つ伏せの姿勢で横たえられ、ホース状の吸引機により腸内の便を吸い出した。

その後、隣室の洗い場で、シンクの中に香子をうつ伏せの姿勢で横たえ、洗剤を染み込ませたスポンジを使い、まるで食材を洗うような手付きで全身を清め始めた。

香子の長い太腿を押し開き、股間は十分な時間をかけ、丹念に洗った。両肩の関節を外されている香子に為す術は無かった。

「さあ、下準備は終わったよ」

勝子が調理台の上に、仰向けの状態で横たえられた香子の見事な裸身を食い入るように見詰めていた。

「お前のように極上の身体を持った娘をただ料理するには、何か勿体無いね。そうだ、いいこと思いついたよ。知りたいかい？今にわかるよ」

勝子は、香子の美しい乳房を手で揉みながら、話し掛けていた。香子は空ろな視線を天井に向けているだけだ。

午後六過ぎ、ペンション一階の食堂には、

香織と奈菜の二人しかいなかった。優に由梨それに瞳の三人は、自室でビデオ鑑賞に熱中していた。教師の美香は、帰らない二人の生徒を捜しに行ったまま戻らなかった。

「他の人達どうしちゃったんだろ？」

香織が、暗闇に包まれた窓外を見ながら、奈菜に話し掛けた。香織はきれいな二重瞼の持ち主で、セミロングの黒髪を肩まで伸ばしている。身長百六十五センチ。痩せ型ではあるが、乳房と尻は盛り上がっていた。

「優達は、部屋でビデオ見ているし、先生は真由美達を捜しに行ったみたいよ。いいじゃん、二人で食べようよ」

奈菜があまり関心の無さそうな声で答えた。奈菜は、円らかな瞳を持ち愛くるしい顔をしていた。ミニスカートから覗く太腿にはシミー

つ無く、色白できめ細やかな素肌の持ち主だ。

「そういえば、香子の姿見ていないね」

「さっき、お風呂場に行くのを見かけたよ」

その時、食堂の開き戸が開けられ、シーツを掛けられたキヤスター付きテーブルを押し、勝子が現れた。

勝子は、二人に気付かぬように後ろ手で、ドアに鍵をかけた。鍵が無ければ、外からも中からも開けられないタイプだ。

「待たせたね。あれ、二人だけかい？ いや…
…までよ。後三人いたはずだな」

最後の方は独り言になっていた。

「後三人って？」

奈菜が怪訝な顔で尋ねた。

「ああ、何でも無いよ。単なる独り言さ。そんなことより今夜は最高級のお肉を用意した

「からね。いっぱいお食べ」

「そうね。何かお腹空いちちゃったみたい」

香織が甘えた声で言った。勝子が、キャスター付きテーブルを食堂の中央まで押してきた。そこでおもむろにシートを取り除いた。

「何なのよ！」

奈菜が叫んだ。シートの下から現れたのは、全裸の生きた女だった。うつ伏せに横たえられ、アヌスにはニンジンが差し込まれていた。周りにはトマトやレタス等の野菜が盛り付けられていた。

「この娘、香子じゃない！おばさん。何なのよ。これ！」

香織が抗議の声をあげた。

「だから、さつきも言ったように極上のお肉だよ。これから三人で美味しくいただくんだ」

「香織！奈菜！こいつから逃げるのよ！」

我に返った香子が、力の限りに叫んだ。

「静かにおし！お前は肉なんだよ！」

叫ぶように言いながら、香子の横腹をしたたかに殴りつけた。香子は低い呻き声を上げ、テーブルの上に突っ伏した。

「止めて。香子にそんなことしないで……」

奈菜が、勝子にしがみ付き、涙を流して懇願した。

「煩いんだよ！」

勝子の右手が、奈菜の頬に炸裂した。奈菜はもんどりうって床を転がった。

「奈菜！」

香織が奈菜に駆け寄り、抱き起こした。

「お前達が食べないんなら、アタイひとりです
いただくよ」

勝子は、キャスター付きテーブルに横たわる香子の口に猿轡を噛ませ、近くのテーブルの上に置かれていた携帯用ガスコンロに火を付け、さらにその上に水をはった、シャブシヤブ鍋を載せた。コンロの近くにあつた火鉢には炭がくべられ、真っ赤に燃えており、その中に鉄鑊が熱せられていた。香織と奈菜は、立ち上がり出口に向かって走り出した。

「開かないよ。奈菜。どうすりゃいいの？」

「こつちが聞きたいくらいよ！」

二人はドアノブにしがみ付き、泣き喚いた。

「お前達。無駄なあがきはお止め。この娘の次はお前達だよ。大人しく、そこで待っているんだね」

勝子は、抱き合って泣き喚く二人に背を向け、料理の支度を始めた。

「料理たってね。ネタが新鮮なんで、簡単なシヤブシヤブと刺身にしたよ。どうだい、この太腿や尻の色艶のいいこと。まったく、惚れ惚れするよ」

勝子はごつい左手で香子の太腿を擦りながら、右手に持った大振りの刺身包丁を香子の尻に近付けた。

猿轡を嵌められた香子は、首を回してその様子を憑かれたような視線で見っていた。視線が研ぎ澄まされた包丁の切っ先に吸い寄せられていた。

ザクリという音がして、包丁の刃が尻の膨らみに切り込まれた。鮮血が噴出し、香子が目を白黒させて、全身を震わせた。猿轡をされているので、呻き声が聞こえるだけだ。

背後からガタンという音が聞こえて来た。

見ると二人はショックのあまり、気絶し床に重なるように倒れ伏していた。

勝子は不敵な笑みを浮かべ、包丁を動かした。拳大ほどの肉脛が、香子の尻から削り取られた。

香子は、意味不明の呻き声を発しながら、手足をばたつかせるだけであった。

今度はむっちりとした太腿に刺身包丁が入られ、同じように拳大の肉脛を削り取られた。

香子の背筋が一瞬仰け反り、白目を剥いて突っ伏した。そのまま動かなくなった。微かではあるが息があった。激痛のあまり意識を失っているようだ。

勝子は、火鉢から鉄鑊を抜いて、真っ赤に熱せられた先端部分で香子の深い傷口を焼き、

止血した。生肉が焼ける香ばしい匂いが部屋中に満ちた。

「簡単には死なせないよ。生きている方が肉は美味しいからね」

独り言を言いながら、鉄鑊を火鉢に戻した。

勝子は、香子の尻と太腿から切取った肉塊を俎板に載せ、鼻歌を歌いながら、薄くスライスした。それらを皿に盛り付け、キャスター付きテーブルに椅子を寄せて腰掛けた。シャブシャブ鍋の水は沸騰していた。長ネギや白菜や椎茸等の野菜を入れ、煮立ったところで、香子の肉をさっと湯通ししてから、まず、ポーン酢ダレで食べてみた。

「フーム……。堪らない美味しさだね。癖になる味だよ」

二切れ目は、胡麻ダレに付けて食べた。勝

子は満面の笑みを浮かべ、溜息を付いた。

「お前の肉は最高にイケてるよ。次はオマ＊
コを食べてあげるね」

テーブルの上に横たわり、苦しそうな息を
している香子に話し掛けた。

刺身包丁を手に取り、香子を仰向けに横た
え、肉脛を抉り取られた太腿を開かせた。

「きれいなピンク色しているよ。ほとんど使
っていないようだね」

陰毛を指先で弄びながら、話し掛けた。お
もむろに刺身包丁を香子の股間に差込、陰周
辺を切り裂き始めた。サクサクと肉を切り裂
く音とともに、重たい呻き声が部屋中に満ち
た。その時、戸口の方からボタンという音と、
何かを引き摺るような音が聞こえて来た。勝
子は戸口のガラス窓を一瞬ジロリと見つめ、

ニンマリとした笑みを浮かべた。

「何なの、あいつは？」

由梨が失神した優の肩を担ぎ、食堂から遠ざかろうと必死に引き摺っていた。

「きよ……。香子が殺されちゃった」

瞳が呆然とした表情で、ふたりの後を追っていた。

「狂っているよ。あいつ、香子の肉を食べてたじゃない」

「け……警察を呼ばなくちゃ！」

瞳がはっと我に返り、由梨を助けて優に肩を貸した。

「それより、逃げるのが先だよ！」

由梨が叫ぶように言った。

「香織や奈菜が捕まっているよ。助けない

の？」

瞳が泣きじやくりながら、由梨に迫った。

「あたし達じゃ無理だよ。あのデカイ女に敵うわけないじゃん。ここから逃げ出して、何か携帯がつかえるところで警察を呼ぶんだ」

そうこうしているうちに、ペンションの出口に辿り着いた。

「駄目だ。鍵が掛かっている」

由梨が言うように、ドアは外から施錠されていた。由梨が優を肩で支えながら、力任せにドアを蹴ったが、分厚い樫木製のドアはびくともしなかった。

「瞳、優をちよつと支えていて」

由梨は近くにあった窓のカーテンを開けた。窓の外にはシャッターが下ろされていた。窓を開けてシャッターを上げようとしたが、こ

ちらも施錠されていた。

「私達、閉じ込められたの？香子みたいに食べられちゃうの？」

最後は涙声だった。

「泣いたって助からないよ。今は他の出口を捜すしかないんだ」

由梨は優の身体を瞳から受け取り、床に座らせて、頬を何度か叩いた。

「優、目を覚まして。お願い！」

「うつ……。私達……。きよ……。香子！」

優が由梨の胸に抱き付いて、泣き叫んだ。

「大丈夫だよ。優は由梨が守るから。さあ、もう泣かないで」

三人は、玄関を離れ、食堂とは反対側の方へと廊下を走った。廊下の窓にはすべてシヤッターが下ろされていた。三人は一階を諦

め、二階に上った。二階の窓も全て施錠されていた。

「駄目だ。完全に閉じ込められたようだね」

由梨が、内側から窓のシャッターを手で叩きながら言った。

「どうしたら言いなの？」

優が目に涙を溜めて由梨にしがみ付いた。

「こうなったら、どれかの部屋に籠るしかないさそうだね」

あの大女がいつ現れるか気が無かった。

三人は、由梨の考えに従い、近くの洋室に入りドアに鍵をかけた。

「ダンスを移動させるからちよっと手伝って！」

由梨が二人に洋服ダンスをドアのところまで、移動させるのを手伝わせた。

「ダンスだけじゃ不安だね。そうだ、ベッドも使おう」

三人で力を合わせ、ダブルベッドを戸口に寄せた。その部屋は、洋室の中では最も広く、二十畳ほどの広さがあつた。バス・トイレも備え付けられていた。

小型冷蔵庫には、缶ジュースや麦茶などのペットボトルが数本と缶ビールが1ダースに、チーズやサラミ等の酒のつまみが数種類収められていた。

「この部屋なら、トイレもあるし、飲み物や食べ物も少しはあるから、二、三日は何とかなるよ」

由梨は冷蔵庫を物色しながら、二人に言った。

「その先はどうするの？」

瞳はダンスやベッドで塞がれた出口を見詰
めながら言った。

「……。シャッターを開けられたら何とかな
るんだけどね」

その頃、香織と奈菜は、勝子によって食堂
から調理場に運ばれているところであった。
意識を失った二人の少女が、大女の勝子によ
って、足首を掴まれ廊下を引き摺られていく。
調理場に入ると、勝子は真っ先に二人を調理
台に横たえ、着ていた衣服を剥ぎ取っていっ
た。

全裸に剥いた後で、身長が百六十五センチ
ほどであり均整が取れ美しい肢体を持つ香織
の乳房に喰い付いた。ざらついた舌で、瑞々
しい乳房を存分に舐め回した。香織の美乳に
満足すると今度は、身長百六十センチほどの

奈菜をうつ伏せにして、盛り上がった白い尻を両手で押さえつけ、割れ目に顔を押し付け、アヌスを舐り始めた。舐めるといなか噛む感じだ。アヌスを舐め回す淫靡な音が調理場に満ちていく。

勝子は香織の乳房と奈菜のアヌスを交互に楽しんでいた。穢れ無き十八歳の瑞々しい裸身に厭きることには無かった。

暫く舌と手で二人の裸身を弄んだ後、二人を調理台に並べてうつ伏せの姿勢で横たえ、ジーンズを脱ぎ捨てた。脂肪のために醜く弛んだ太腿の合間から、黒く禍々しい感じのする張形が突き出ていた。

「お前達まだ、あまり男を知らないようだから、女のアタイが本当の喜びを教えてあげよ。冥土の土産にしな」

勝子は、意識が戻らない香織の尻を両手で持ち上げ、膣口の先端部に張形の先を押し当てて一気に挿入した。

ズブリといった感じで奥まで貫いた。長時間の陵辱のためにそこは湿り気を帯びていた。

「うっ…。何？」

香織の意識が戻った。

「気が付いたかい？ いいね。気を失った女を犯るのは、死姦みたいで、あんまり趣味じゃないんだ」

勝子が前後にゆっくりと腰を振りながら、楽しそうに笑った。

「止めて！ そんなことしないで」

うつ伏せに尻を押さえ付けられながら、香織が泣き叫んだ。

「煩いんだよ！ こいつで喉裂かれないのか

い？」

近くにあった刺身包丁を香織の顔の近くに突きたてた。香織はギラギラと輝く刃から視線を反らすことができなくなった。今は泣き叫ぶのを止め、呆然とした表情をしていた。

「いいよ。その調子だ」

勝子は両手を香織の脇の下に差込、乳房を握り締めながら、激しく腰を使い始めた。

童顔の奈菜の場合は、仰向けに横たえられ、唇を吸われながら膣を犯されていた。大女の巨体に押し潰されそうになっていた。意識を戻したが、口を吸われているので叫び声をあげることができなかった。眦から涙が止め処なく零れ落ちていた。

激しい陵辱の後で、二人を調理台の上に、

うつ伏せの姿勢で横たえ、ホース状の吸引機で腸内の排泄物を無造作な感じで吸い出した。

それが終わると、隣室の洗い場に移動し、湯が張られた巨大なシンクに二人を横たえ、まるでダイコンやニンジン等の食材を洗うかのような手付きで、一人の全身を洗い清めた。

次に、調理場に戻り、大人三人が楽に入れるくらいの大鍋に水を溜め始めた。

勝子は二人を、調理台の上で抱きあわせて、互いの膺を双頭パイプで結合させ、ロープで縛り付けた。

二人をそのままにして、大型冷蔵庫からニンジンやタマネギなどの野菜を取り出し、俎板の上で刻み始めた。勝子の手際は見事であり、あっという間に三ケの大型ボールが野菜でいっぱいになった。

「これで下拵えは終わったね。美味しい女肉鍋ができるよ」

独り言を言いながら、ロープで抱き合わせるようにして縛り上げた二人の裸身を水が張られた大鍋に入れ、コンロの火を点けた。

「何をする気なの？」

香織が弱々しげな声で聞いた。

「見てのとおりだよ。お前達の肉で鍋を作るのさ」

「止めて！そんなことしないで！」

奈菜が目は大粒の涙を浮かべ、泣き叫んだ。

冷水は何時の間にか、四十度に達していた。

二人は恐怖と絶望のためか、泣き叫ぶことを止め、空ろな表情で天井を見上げていた。

「香織、私達死んじゃうんだね？」

奈菜が弱々しげに香織に話し掛けた。

「二人一緒だよ。好きよ。奈菜」

香織が奈菜の口に吸い付き、優しく舌を舐めた。

「いい眺めだね。可愛い女が二人で乳繰り合うのは。お前達レズだったんだね」

勝子が自分のことは棚に上げて、楽しそうな笑みを浮かべた。湯は五十度に達しようとしていた。

「熱い熱いよ。奈菜」

「く……苦しい……」

「さ……さようなら。奈菜」

長伸の香織の顔が水中に没していった。湯は既に耐えられぬほどに熱くなっていた。

「い……嫌！香織！」

それが奈菜の断末魔であった。香織を追うように水中に没した。湯は既にぐらぐらと煮

だっていた。

それから一時間ほど煮込んでから、シャモジで鍋の底に沈んでいた二人の身体を、強く叩いた。肉は完全に煮込まれており、骨から引き剥がされ、脂身とともに水中に広がった。二人の生首が浮き上がってきたので、それを大鍋から引き上げた。

勝子は、醤油や酒、ミリンなどの調味料を大鍋に注ぎながら、差し渡し一メートルはある巨大なシャモジで中を掻き回し、スプーンで味見をした。

「いい出汁が出ているよ。美味いね」

溜息をついた後で、大量の野菜を大鍋に入れた。勝子は、作業を終えると、大きな伸びをして、調理場の椅子に腰掛、目を閉じた。すぐに雷鳴のような轟が、調理場に満ち溢れ

た。

第四章 極上の獲者達へと続く